様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年　5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19530876
研究課題名（和文）
　社会資源過少地域における就学前障害児支援システム構築に関する実践的研究
研究課題名（英文）
　Practical study for developing a preschool-age handicapped children ’ s support system in a less social resource area.

研究代表者
　肥後　祥治　（ HIGO SHOJI ）
　熊本大学・教育学部・准教授
　研究者番号：90251008

研究代表者の専門分野：特別支援教育
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：子育て支援、療育システム構築、就学前療育プログラム、ＣＢＲ

１．研究計画の概要

障害の早期発見・早期治療のコンセプトに基づく就学前の療育システムの作りは、障害の診断等に関する経験的知識や技術的な発展とは裏腹に、療育システム構築に関する研究の遅滞といった状態により大きく遅滞している。この理由として本研究は、以下にあげる２つの根本的問題が、存在しているという視点に立っている。

(1)専門家及び専門的知識に対する盲目的信頼とそれによる非専門家の無力化
(2)現在の地域療育システム作りのパラダイムの機能不全

高度に分業化された先進国においては専門家の存在意義やその機能を否定することは不可能であり生産的ではない。しかし、専門家によるサービスのみを意味のある活動と権威付けすることになると非専門家による類似のサービスの無力化を導きかねない。そのようになると、専門家の布置や施設設備といった顕在的社会資源の絶対量に大きな格差が存在する中では、意味のあるサービスを得るために専門家の訪問や出現を待つといった先の見えない期待をする方向性をとりやすくなる。またこのような厳然と存在する格差が有りながら、地域療育システム作りを都市部と同様に施設を作り専門家を雇用することのみで進めていうとすると、その財政的基盤の脆弱性等の問題からシステム作りが進められないといった現在の療育システム作りのパラダイムの問題がある。

この２つの問題点は不可分的に結びついているが、肥後（2003）は、これらの問題を解決する糸口として、途上国のリハビリテーションの推進パラダイムとして活用されている「地域に根ざしたリハビリーション（CBR）」の可能性を指摘している。本研究ではこの２つの問題点の存在を意識した地域療育システム作りの方法を模索し、提案することを目的しているが、その手法として CBR のコンセプトを中心に据えた具体的な取り組みやプログラムの開発を基本におきながら、実践的な研究を指向していく。

２．研究の進捗状況

研究計画は、以下の流れにそって実施をしていく。

(1)長期にわたって行われてきた地域の療育プログラムの分析に基づき、非専門家に実施可能な療育内容、療育技法を整理し、本研究で計画するプログラム（親子支援プログラム）の概要を作成する。
(2)親子支援プログラムを開発する。
(3)作成したプログラムの臨床実験（意義および効果の測定）
(4)プログラムのマニュアル作成

現在は、(1)の段階の研究においては、従来からある地域の２つの療育活動（自閉症児、ダウン症児）のプログラム分析から、プログラムの構成ユニットの抽出、プログラムコンテンツの整理等を行った。(2)(3)の段階は、平成１９，２０，２１年度とそれぞれセットで実施することで、作成したプログラムの改善に取り組んできた。親子支援プログラムは、保護者用・ボランテア用・子ども用の３つのサブプログラムから構成されている。保護者プログラムには、参加者の意見を採り入れながら、微修正を行ってきた、ボランテアプル

グラムは、当初親プログラムと類似点が多かったが、３回にわたる修正の結果、内容、研修形態も多く異なるものとなってきた。子どもプログラムでは、１歳半～３歳、３歳～５歳の２つの版の検討を行ってきた。したがって、先の(1)～(4)の段階で表すと現在の研究の進捗状況は、(3)作成したプログラムの臨床実験（意義および効果の測定）段階であるといえる。平成２２年度は、引き続き、(3)の研究の実施と、(4)のプログラムのマニュアル作成に取り組みたいと考えている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。研究成果に関しても、日本特殊教育学会での発表を中心にコンスタントに行うことができている。また、本年度は、研究の流れの最後の段階である(4)プログラムのマニュアル作成に取り組む状況ができつつあるからである。

４．今後の研究の推進方策

地域に根ざした療育システムの構築において重要となるプログラム実施主体の創出、といった課題に取り組むビジョンをもって、実践的な研究を進めていく必要がある。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 福田沙耶花・宮本美哉・肥後祥治．CBR 保護者支援プログラム（第二期）の効果と改善点－半年後のフォーカスグループインタビューの分析から－．熊本大学教育学部紀要，人文科学，58，145-157．2009 年，査読無し
② 肥後祥治．地域における特別支援教育体制の構築戦略の分析とその運用．情緒障害教育研究紀要,27,242-250,2008 年,査読無し
③ 肥後祥治・宇都宮絢子．熊本県内の地域子育て支援センターの現状と課題－障害児とその保護者の支援の観点から－．熊本大学教育学部紀要,人文科学,57,113-120,2008 年，査読無し

〔学会発表〕（計６件）

① 岩橋亜侑美・宮本美哉・百田好香・半田健・前田浩志・垂水透太・宮崎亜紀・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第Ⅱ期(1)－第Ⅱ期プログラムの特徴と保護者支援プログラムの結果の概要－．日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集，宇都宮大学，236，2009 年．
② 百田好香・半田健・宮本美哉・岩橋亜侑美・前田浩志・垂水透太・宮崎亜紀・肥後祥治．CBR に基づく親子支援プログラム開発に関する研究：第二期(2)－子どもの集団活動プログラムを中心に－．日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集，宇都宮大学，237，2009 年．
③ 前田浩志・宮本美哉・肥後祥治．療育ボランテア養成プログラム作成に関する研究－２日間短期集中プログラムの立案と有効性－．日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集，宇都宮大学，239，2009 年．